

O2-010

3歳児の神経発達予後と周産期における母体のメンタルヘルスとの関連

京野 由紀¹、西山 将広¹、徳元 翔一¹、
山口 宏¹、富岡 和美¹、三品 浩基²、
野津 寛大¹、永瀬 裕朗¹

¹ 神戸大学医学部附属病院小児科、

² 神戸市こども家庭局こども家庭支援課

【目的】

妊娠中の精神疾患は、出生児のその後の発達に影響することが知られている。しかし、我が国では妊娠中のメンタルヘルスに関するスクリーニングや具体的な介入方法は確立していない。そこで、3歳児の神経発達予後と周産期の母体の精神状態を表す指標との関連を評価することを、本研究の目的とした。

【方法】

神戸市では妊娠届出時に各胎児に固有IDを割り付け、胎児期、新生児期、乳幼児期の情報を縦断的に追跡出来る仕組みがある。これを活用し、神戸市倫理委員会の承認の下、後方視的研究を行った。対象は2014年4月から2016年3月までの出生児のうち、各時期の情報が収集できた児とした。従属変数を3歳児健診での神経学的発達の異常あり・なし（健診担当医師の判断）の二項とし、独立変数を「妊娠前および妊娠中の精神科相談歴」、「エジンバラ産後うつ病自己評価票（EPDS）の点数」とした。妊娠届出票で得られる10項目、新生児訪問指導票で得られる14項目も独立変数に含め、二項ロジスティック回帰分析を行い、有意水準は $p < 0.01$ とした。

【結果】

分析の対象は10,427名であり、3歳児健診で神経学的発達異常があった群は873名（8.37%）であった。3歳児健診での神経学的発達の異常は、妊娠前および妊娠中の精神科相談歴（ $n = 80$, adjusted odds ratio : aOR [99% confidence interval ; CI] 1.56 [1.10 - 2.22, $p = 0.001$ ）、EPDSが9点以上（ $n = 105$, 1.36 [1.01 - 1.84], $p = 0.008$ ）、妊娠中の相談相手がいない（ $n = 32$, 1.99 [1.14 - 3.45], $p = 0.001$ ）、出産後の手伝いがいない（ $n = 71$, 1.49 [1.03 - 2.16], $p = 0.006$ ）、男児（ $n = 612$, 2.51 [2.05 - 3.06], $p < 0.001$ ）、帝王切開（ $n = 209$, 1.39 [1.11 - 1.75], $p < 0.001$ ）と関連があった。

【考察】

周産期の母体の精神状態は3歳児の神経学的発達予後に影響することが示唆された。また妊娠中の相談相手、出産後の手伝いの有無も重要な独立因子であることが判明した。妊娠届出時および新生児訪問時で得られる情報も、支援を要する母子のスクリーニングおよび適切な支援に結び付ける指標になりうる。